

特集にあたって

梶谷 懐

「中国」という存在を大きな歴史の流れにおいて捉えようとする際、その「凝集力」の源泉がどこにあるのか、ということが常に関心を引きつけてきた。また現在の中国に目を移してみても、社会における多くの「分節化」の要因をかかえながら、いかにして国家としての「統合」を図っていくのか、ということがかつてないほど重要な課題となっている。

毎年恒例の総会シンポジウムでは、過去数年にわたり「グローバリズム」を一つのキーワードとして「外部世界との関係の中で中国をどう位置づけるか」を追求してきたが、ここで視点をいったん国内の問題にむけ、「統合」と「分節化」という対立する概念をキーワードに、「中国における国家と社会の関係」という古くからのテーマに歴史と現状分析の二つの視点から新しい光を当てていくことを予定している。

その第一回目のテーマは「階層分化と国家統合」である。

社会主義国家としての中華人民共和国は、その成立過程において「階級闘争」が国家の担い手である共産党の求心力を高める上で重要な役割を果たしてきた。その反面、国家建設の中で新たな「階級」が生まれ出され、社会的な差別を生んできたという経緯がある。

また近年の中国では、経済の市場化とグローバル化が進む中で社会階層の分化が著しいことが指摘されており、階層問題を扱った図書の出版が相次いでいる。例えば、2002年に出版された後発売禁止になり国内外で大きな話題を呼んだ陸学芸編『当代中国社会階層研究報告』では、農民や産業労働者を社会の下層階層として位置づけ、中間層の形成が遅れている中国社会の現状を浮き彫りにした。

2004年の3月に行われたシンポジウムでは、現状分析の分野から菱田雅晴氏、歴史分野から奥村哲氏という、研究者として脂の乗り切った論客を報告者に迎え、中国社会における「階級」・「階層」をめぐる問題が、社会主義国家建設の中でどのような意味を持ってきたのか振り返りつつ、現在の「社会階層」をめぐる状況の変化が今後の国家統合に与えていく影響などについても活発な討議が行われた。本特集は、アクチュアルなテーマをめぐる歴史研究と現状分析の対話という「現代史研らしい」試みの成果として実りあるものであることを確信している。

(かじたに かい・神戸学院大学)